初恋

春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
初恋

【Ｎコード】
Ｎ１７３６Ｋ

【作者名】
春

【あらすじ】
高２で転校した美貴。
隣の席の外見と性格が真逆のよくわかんない男子・・・牧原
美貴にとって初恋である彼との恋の行方は？？？

1（前書き）

稚拙な文章になってます。

まとまりありません。

つまんなくなったら読むのやめてください。

自己満です。

以上のことを理解して頂けた方だけ読むようにお願いします。

1

「西部高等学校から転入してきました。河西(かさいみき)美貴です。これからよろしくお願いします」

２００９年春、私は2年に進学するとともにこの南東高等学校に転入することになった。
もちろん親の仕事の都合でだけどね。

「それじゃ河西さんは窓側の一番後ろの席に座って」
私はこのクラスの担任の指示に従う。

「河西さん・・・？これからよろしくね☆　俺は牧原雄二(まきはらゆうじ)」

「河西美貴です。　よろしくね」

今声をかけてきたのは隣の席の眼鏡男子。黒髪で紳士的だなってのが第一印象の彼
そして私の外見、髪色は少し茶色っぽい感じかな？ただ色素が薄いだけだけど・・・w

高2って言ったらもうみんな馴染んでてグループ的なのもほぼ完成されてしまっている頃。

まぁ基本一人でいるのが好きだから友達ができようが出来まいが関係ないんだけどね。

そんなこと考えてるうちにホームルームが終わって学級委員の号令がかかる。

このクラスの学級委員は男子みたいね。　学級委員はさわやかスポーツ系男子な感じ。

前の学校は女子が多かったからなんか変な感じ

1時間目の準備をしてたら

「河西さんて髪茶色いね、染めたりしたの？」

いきなり何言ってくるのかと思ったら牧原ってやつ。意外と社交的みたい。

「ううん。色素うすいみたいで・・・染めてるわけじゃないから」

正直人と話すのが苦手な私。　話しかけられた時しか声出さない

「そっか。これから隣だからよろしくね☆」

屈託のない笑顔でそう言ってくれてる彼。

「うん。ありがとう」

それから私は1時間目の準備をして本を読む。

やっぱり本を読んでる時が一番幸せかな。誰にも邪魔されず、自分の世界に入っていける。

　そうこうしてるうちに授業の始まりを告げるチャイムが鳴り響く

それからは前の学校と同じように過ごした。普通に授業を受けて、寄り道しないで家に帰って

家に着いても誰もいない　ウチの親は離婚してる。だから今は母親と二人暮らし。

私はそんな暮らしに慣れている。
もちろん母親には感謝してる、女手ひとつで此処まで育ててくれたんだし。

なんか今日はもの凄く疲れたな。

やっぱ学校ってダルイ

そんなことを考えながら自分の部屋に入る。ベッドに横になってボーっとしてたら突然携帯が鳴りだした。

みたらお母さんからのメール

美貴へ　今日は遅くなるから先にご飯食べててね。

たった一文。　たったそれだけ。　まぁもう慣れたけど。
私のお母さんは仕事が忙しいみたいで帰ってこないときもある。

だから私は家で一人というのが多い。
なんか今日はご飯食べる気しないぁ・・・

あれから寝てしまったみたいで起きたら夜中の１１時だった。

こんなに寝てたんだぁ　お腹はすいてなかったからお風呂入ってから寝た。
そして朝がやってきて、いつもの一日が始まる・・・

「おはよう」

学校の正門を抜けてすぐ誰かから声をかけられた。昨日も聞いた、彼　牧原雄二。

「おはよう」

急に声をかけられびっくりしたが一応あいさつを返しておく。

「早くしないと遅刻かもよ？」

不意にそんなことを言われた。　私が遅刻？いつもちゃんと間に合ってるのに？

そんな疑問を抱きながら校舎の壁に掛けられている時計を見る・・・

７：５５

「やばッ」

「じゃ、お先に☆」

私はもの凄く遅くなっていたことに気付き走り出す。牧原君は軽快な走りを見せていた。

その背中を眺めながら歩いていると、先生が正門のところで遅刻確定の生徒を急かす声が聞こえた

ふっと我に返った私は牧原君の後を、２年の昇降口へと走り出す。

教室に着いたのはチャイムが鳴る１分前だった。

ふぅ、危なかった。　私は何事もなかったかのように席に着く。

「お、ちゃんと間に合ったんだね」

本を読もうとしたら隣からやけに元気な声が聞こえた

あぁ、また牧原だ。　てかもうフルネームやめて名字だけでいっか・

・・

「あ、うん」
そっけない返事をする。流石に無視は悪いと思ったから
それから本を読みだす。　想像すると怖くなるようなホラーオカルト小説

しばらく読んでいたら先生が来て学級委員の号令が聞こえた。　みんなであいさつをする

「おはようございます。１時間目の教科担当は職員室に来てください。」
それだけ言うと先生はさっさと去って行ってしまった。

一時間目は国語、だから教室でゆっくりすることができる。

「ねぇ、休み時間にまで何読んでんの？」
まただ。いい加減うざくなってくるのは私だけなのかな。。。
読書に集中したかったから少し無視してみる。
あまり絡まれるのは好きじゃないからなぁ

「スルー！？　ちょっと酷くない！？」
凄い大袈裟なリアクション　あぁもう。五月蠅いんだってば
「ホラー小説だけど」
棒読みで答える。　きっとこんなんだから友達もろくにできないでいつの間にか一人が好きになったのかな？

なんて考えてみたりして
友達なんていらない。彼氏なんてもってのほか。。。　だったのに

2

そんなこんなで学校が終わって下校時刻がやってきた。

「さようなら」

みんなで先生にあいさつしてそれぞれ別々の道に別れてく

私は部活に入ってなければ特に予定もなかったから寄り道せずに帰ろうと思った

帰る途中に本屋を見つけた。

鞄の中のケータイを探って時間の確認・・・１６：００

まだこんな時間かぁ・・・　ちょっと寄ってこっかな

ここの本屋はさほど大きくなくてちょっと古い感じだった。

なかは薄暗くて埃まみれな感じ。

どんな本があるんだろう…？

こげ茶色の本棚には古い辞典のようなものから真新しい小説などまで様々だ

ちょっと暗い雰囲気な室内も気に入った

部屋の中を１周して掛け時計をみると１９：００を示している。

そろそろ帰らなきゃな。外も薄暗く、空が紺色になり始めている。

ここから家までは１５分ほどかかる。

今日はお母さんいつ帰ってくるのかな…

母の予定が気にり、時間短縮するため細い路地裏のような道を通って帰ることにした。

この道を抜ければすぐに家に着く

そんなことを考えながら歩いていると前から3人組の大学生くらいの人が歩いてきた。
ちょっとガラの悪そうな人達。

私は今まで一度も絡まれたことがないから今回も大丈夫だろうと先を急ぐ。

私は、その少しガラの悪そうな人達の横を通り抜けようとした時だった。
ドン、と肩に軽い衝撃が走る。

「痛っ・・・」
「痛えー…てめぇ、何ぶつかって来てるんだＹＯ」
「あ！ご、ごめんな、さい」

男はラップ口調で、私に掴みかかってきた。
しかし、ラップ口調なので怖さで震えるというよりも笑いをこらえる為に肩を震わせた。
その男は何を思ったのか私が震えているのを、怖くて震えているのと思ったらしく調子に乗ってまだ私に言ってくる。

「ちゃんと前見てろＹＯ！肩が外れちまったじゃねーかＹＯ！」

肩が外れているっていうのなら、何故両手でＤＪのように手を動

かしているのはなぜだろう・・・。
ここは笑ったら負けだということを自分にしっかり言い聞かせる。
「ご、ごめんなさい」
「ごめんなさい、で済んだら警察はいらないＹＯ！！！！」
「そんぐらいにしとけよチャーリー。結構可愛い娘だし、連れてく？」
このＤＪ男チャーリーって言うんだぁ。
そんなこと考えてたらもう一人の男（チャーリーって呼んだ男）が私の右腕を掴んできた
「キャっ。離してください！」
「まだ俺らぶつかってきた詫びしてもらってないから。来いや」
「そうだね！一緒にきちゃいなｙｏ！」
チャーリーとやらが左手を掴んで路地の奥の方に引っ張ろうとした。危険を察した私は抵抗を試みる
「やめてください！　やめて！！！」
どんなに叫んで腕を振っても男の力にかなうはずもなく路地の奥の方に引っ張られつつあった。
そんな時
「てめーら俺のに何してくれちゃってんの？」
不意に後ろから低く威厳のある声が聞こえた。
私をつかんでいた腕はほどかれ、彼らは後ろを振り向いたかと思うと後退りはじめる。

誰がいるのか気になり後ろを振り返るとどこかで見覚えのある顔・・・

街灯による逆光のせいではっきりと見ることはできなかったけど確かに見覚えのある・・・

そんなことを考えていたら後ろから叫び声が聞こえた。

3

私は、その少しガラの悪そうな人達の横を通り抜けようとした時だった。
ドン、と肩に軽い衝撃が走る。

「痛っ・・・」
「痛えー…てめぇ、何ぶつかって来てるんだＹＯ」
「あ！ご、ごめんな、さい」

男はラップ口調で、私に掴みかかってきた。
しかし、ラップ口調なので怖さで震えるというよりも笑いをこらえる為に肩を震わせた。
その男は何を思ったのか私が震えているのを、怖くて震えているのと思ったらしく調子に乗ってまだ私に言ってくる。

「ちゃんと前見てろＹＯ！肩が外れちまったじゃねーかＹＯ！」

肩が外れているっていうのなら、何故両手でＤＪのように手を動かしているのはなぜだろう・・・。
ここは笑ったら負けだということを自分にしっかり言い聞かせる。

「ご、ごめんなさい」
「ごめんなさい、で済んだら警察はいらないＹＯ！！！！」
「そんぐらいにしとけよチャーリー。結構可愛い娘だし、連れてく？」

このＤＪ男チャーリーって言うんだぁ。

そんなこと考えてたらもう一人の男（チャーリーって呼んだ男）が私の右腕を掴んできた
「キャっ。離してください！」
「まだ俺らぶつかってきた詫びしてもらってないから。来いや」
「そうだね！一緒にきちゃいなＹＯ！」

チャーリーとやらが左手を掴んで路地の奥の方に引っ張ろうとした。
危険を察した私は抵抗を試みる
「やめてください！　やめて！！！」

どんなに叫んで腕を振っても男の力にかなうはずもなく路地の奥の方に引っ張られつつあった。
そんな時

「てめーら俺のに何してくれちゃってんの？」

不意に後ろから低く威厳のある声が聞こえた。

私をつかんでいた腕はほどかれ、彼らは後ろを振り向いたかと思うと後退りはじめる。
誰がいるのか気になり後ろを振り返るとどこかで見覚えのある顔・・・
街灯による逆光のせいではっきりと見ることはできなかったけど確かに見覚えのある・・・

そんなことを考えていたら後ろから叫び声が聞こえた。

「ご・・ごめんなさい牧原さん！！！」
「すみませんでした！！！」

あの男たちが必死に謝っていた。
そこでやっと思い出す。助けてくれた人が牧原に似ていたことを

「次こんなことあったらただじゃおかねぇから」

ハッと振り返るとそこには男たちの姿は無く、牧原君がこちらに歩いてきた。
「君が美貴ちゃん？」
「え？」
とてもよく似ているが牧原ではなかった。
「初めまして。僕は雄二の兄、優人（ゆうと）だよ。」
「牧原君のお兄さんでしたか。　助けて頂いてありがとうございます。」

さっきの勢いは何処へやら、とても優しそうなおっとりとした人だった。
「これからは気をつけてね。ここら辺結構夜は危ないから。じゃあね」
「あ、ありがとうございました！」

さっさと帰ってしまう優人さんの背中に向かってもう一度お礼を言った。
すると彼は片手を挙げて振りかえってくれた。

それからすぐ家に着いた。　　まさか牧原に兄がいたなんて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1736k/

初恋

2010年12月26日22時17分発行